

金鳥の渦巻

蚊取り線香の成功の秘密・・・「渦巻き」

「金鳥の夏、日本の夏」、渦巻き型の蚊取り線香は、電気式蚊取り器が台頭する今でも日本の夏の風物詩のひとつといってもいいだろう。では、なぜあの蚊取り線香は渦巻き型になったのだろうか。それではクイズをひとつ。あの渦巻きを長く伸ばすと、その長さは何cmくらいになるでしょうか？。



蚊取り線香の誕生	<p>それは創業者がアメリカから除虫菊の種を入手したことから始まる。除虫菊を捨てると、その場所だけ多くの虫が死んでいることから殺虫効果を発見。除虫菊には、ピレトリンという殺虫効果のある成分が含まれていた。</p> <p>それを栽培して乾燥粉末化して「ノミ取り粉」として商品化。さらに粉を火であぶると殺虫効果が上がることに着目、そして仏壇のお線香にヒントを得て、この粉を線香に練りこむことを思い付き、1890年、世界初の蚊取り線香が誕生した。</p>
渦巻きの誕生	<p>しかしこの蚊取り線香には難点があった。棒状のため40分程度で燃え尽きてしまう。長くすると折れやすくなってしまふ。細いため煙も少なく2～3本同時に使わないと効果が得られない。長持ちさせるためにどうすればいいか。</p> <p>「渦巻きにしてみたら・・・」創業者の妻のアイデアだった明治35年(1902)渦巻き型蚊取り線香が発売。</p> <p>棒状から渦巻き型にすることで、長さも75cmまで伸び、燃焼時間も7時間まで伸ばすことに成功。</p> <p>効果がほぼ一晩中持続するようになった「金鳥の渦巻」はまたたく間に日本の夏の必需品になった。</p> <p>なお現在では、ピレトリンよりも強力なアレスリンが化学合成できるようになり、除虫菊は香りづけ程度にしか使用されていない。</p>

大日本
除虫菊
株式会社

ところで「金鳥」のブランド名で知られるこの会社、会社名が「金鳥株式会社」かと思ったら、蚊取り線香に有効成分として除虫菊が使われなくなった現在でも、会社名は「大日本除虫菊株式会社」。創業のきっかけを忘れないため社名は堅持しているという。

また、金鳥のテレビCMは非常にユニークなものが多い。起用するタレントとの新鮮なミスマッチ感も相まって毎回話題となり、CM中のフレーズが流行語になる事も少なくない。ただし「蚊取り線香」のCMだけは、夏の情緒のあふれる、全く笑いを指向しないものとなっている。

代表的なものを紹介すると・・・

- ・ルーチョンキ(キンチョール、桜井センリ)
- ・金鳥の夏・日本の夏(蚊取り線香)
- ・トンドレラ、シンデレラ(キンチョール、研ナオコ)
- ・耳にタコ出来た(どんと、ザ・ぼんち)
- ・ハエハエカカカ、キンチョール・よろしいんじゃないですか(キンチョール、郷ひろみ、柄本明)
- ・ホーンマかいな、そうかいな(金鳥マット、掛布雅之、西川のりお、たこ八郎)
- ・亭主元気で留守がいい(ゴン、もたいまさこ)
- ・相撲取りやすつぼんぼんで風邪ひかん(どんと、桂文珍)
- ・プッチンパッチンピチパチパッチン(音浴湯、ポール牧)
- ・ポットンポットン蚊がポットン(マット、中村雅俊)
- ・もつと端っこ歩きなさいよオ(美川憲一、ちあきなおみ)
- ・キン、キン、キンチョウリキッドは、油とチャウチャウベトベトチャウチャウ(キンチョウリキッド、山瀬まみ)
- ・つまらん!お前の話はつまらん!(大滝秀治、岸部一徳)
- ・私が消えたらどないすんの?(田中裕子)

キンチョー「ゴン」のテレビCM、「亭主元気で留守がいい・・・」は、昭和61年(1986)一世を風靡した。伊豆大島三原山が大噴火し、全島民が深夜の大脱出した年である。亭主は元気に働いて、あまり家にいてくれない方が気が楽だという主婦の気持ちを代弁したものとして流行語にもなった。今、亭主側から言わせてもらおうと、…………「女房若くて美人がいい」